

Fate/fairy fantasm ～第六次聖杯戦争～

星らて

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第六次聖杯戦争。それは本来、止められるべき大災害。

「この世全ての悪」を溜め込んだ大聖杯は容赦なく次のマスターを選定する。

これは実際に行われた戦争の備忘録にして、新たなる英雄譚。

「解体戦争」を楽しみに待ちながら、IFの続きを更新していきます。
ハッピーエンドなので安心して読んでください。

目次

どうやら正規ルートではないらしい。

どうやら正規ルートではないらしい。

獣のような怒声が鼓膜に響く。逃げるために、必死になって足を動かした。

途切れそうな息を無理やり吸いきり、千切れそうな腕をそれでも振り抜いて走る。

それでも、だ。

背後から感じる強い圧は消える気配が微塵もない。それどころか。

「……………!!!」

その声は、先ほどから比べて明らかに大きくなっていた。

それも、数段増しで。

大熊を彷彿とさせるその咆哮に、ドクンと心臓が大きく跳ねる。

嫌な汗がべつとりと肌に張り付く感覚。

思わず後ろを振り向いた。

夜の中に、その男の姿を視認する。

——視認できてしまう。

それほどまでに相手との距離は縮まってしまっている。

追いかけてくるその男はあらゆる面で異常と言えた。

まず背丈は目測で190くらいはありそうだ。

おまけにそのがっしりとした体つきは、まず間違いなく日本のものではないだろう。

しかしそれにも増して異常な点はその服装にある。

全身甲冑を服装と区分するなら、の話だが。

そう、そいつはまるで

中世ヨーロッパからやってきたかのような、金属の鎧でその長身を覆っていた。

鎧の色は真紅。

目を引くその赤は、鮮血に染まっているかのように見た者を錯覚させてしまう。

「つうか、鎧着ながら俺より速いってどういう身体してやがんだ!？」

そう叫ぶ間にもそいつとの距離は縮まり続ける。

ガシヤンガシヤンと甲高い摩擦音を響かせながら迫ってくる。わけがわからない。

こいつが俺を追う理由が本当に思い当たらない。

「つち!!!」

どつちにしろ、このままじゃ追いつかれるのも時間の問題だ。

震えそうな声をなんとか御して、思いつきり叫ぶ。

どつちにしろ追いつかれりやどうなるか分からないのだ。

恐怖か、ストレスか。何れにしてもこのまま黙って走り続けるのは限界に近づいていた。

ーそれならいっそ。そんな蛮勇が俺のうちに湧き上がる。

「うっせえー！真夜中に大声上げてんじゃねえ、近所迷惑つてもん考えるボケエ!!!」

「ーーー」

言ってやった。吐き出した言葉は見当違いも甚だしいものだったが、いくらか恐怖が払拭されたような気がした。

返答はない。おまけに、ぴたりと金属音が鳴り止んだ。

(・・・もしかして、止まったのか?)

どうやらそいつは俺を追いかけるのをやめたらしい。

さすがに頭が冷えたのだろう。

それでも、念のため俺は走るのをやめなかった。

気が変わる前に、追いつかれない場所まで行こうと思ったのは自然なことだった。

「いやまじでもう来んなよ」

どこかの神様にも、切に祈る。

もうそろそろ足も限界なんだ。

膝もガクガク来てるし、靴に刻んだ足早のルーンも時間切れの頃合いだ。

かといって、迎え撃ってなんとかなる自信なんて欠片もない。

「これだからチンピラは嫌なんだー」

悪態をつきながら、夜の住宅街を走り抜ける。

魔術を使った俺より足の速いあいつから逃げきる術はただ一つ。

土地勘を使って細道を何度も曲がりまくって、撒くことだけだ。

『山田』と書かれた表札を見つければ、右に曲がる。

『斎藤』があればそこを左に曲がる。

これを出来うる限り短いスパンで繰り返す。

もうさすがに、どうあつても俺まで辿り着くことはできない。

(住宅街抜けた！あとはこのまままっすぐ！)

数時間のことのようにも感じられた、刹那の逃走劇にもようやく終わりが見え始めた。

先ほどから、やはりあいつの足音は聞こえていない。

とはいえ、油断できる状況でもない。

途切れつつある、靴に刻んだルーンに最大限の魔力を込めて、ラストパートをかける。

目的地は、俺の家。

一見するとこじんまりとしたボロ家だが、あそこにはルーンを刻んで結界を作っている。

いかにあのチンピラが脳筋とは言え、流石に魔術師のホームには入れまい。

息が上がる。肺が潰れるかのような痛み。

こんなにも全力で走ったのは、中学校の体育祭以来だ。

それでも、俺は前を向いてー、

視線の先に、真紅の鎧を着た男が立っている。

「……はっつ？」

吐き切った息が白くなる。

逃げ切ったはずのそいつが、俺の前に立っている。

魔術でも説明のつかない現象は、それだけで恐怖の対象となる。

それだつてのに、男は俺に対して明確な殺意を抱いている。

(あ、ダメだ。ー死んだ)

それは直感ではなく、理解。

理性ではなく、本能が導き出した逃れようのない答えだった。

男は飢えた獣のような目をしていた。

獰猛に笑う口元を震わしながら、男は言葉を発した。

「誰がチンピラだ、殺すぞ」
ぶわりと身の毛がよだつ。

品性のかけらもない、どこかの三下が使うような言葉。けれど、だからこそ、それは本心だと理解させられる。

「つつつ!!!、なんで、確かに、撒いたはずだろ!?!」

「悪いが、俺のはそういう宝具なんだ。諦めてくれや。・・・それよりよお」

「だから！俺がつ、追われる理由なんて、心当たりねえんだって！」
男が何か言っている。だけどダメだ。

恐怖で頭がおかしくなったのか、耳がまともに機能していない。だからこそ。言葉を並べろ。さもなきやー。

「誰がー」

「へ?」

「誰が田舎者の野蛮な猿だあ!?!」

「んなこと言ってるよ!!ー!ーぶべエ!?!」

赤い鎧が消えた、と同時に腹にとんでもない衝撃が伝わった。

気持ち悪い浮遊感と、三半規管が揺さぶられる感覚がやってくる。生きているのは、視界だけだ。急いで状況を把握しないと。

瞬時に目に魔力を通し、強化する。

遠目に見えたのは、男が長い脚をこちらに真っ直ぐに伸ばしている姿。

ああ、つまり、俺は思いっきり蹴飛ばされたのか。

「ーがつつつはあああうつ!?!」

理解した時には、とつくにどこかの敷地まで飛ばされていた。

三十メートルほどは宙を舞ったのだろうか。

三度、地面に叩きつけられてようやく俺の体は停止した。

見渡せば、三つの小型のクレーターが出来上がっていた。

「つつづ、なんつう脚力してんだよ・・・」

ここは、どこかの屋敷の中だろうか。やたら広い敷地が広がっていた。

奥には立派な和風の家屋が並んでいる。

そうして、顔をあげた俺は心中をそいつにぶつけずにはいられなかった。

「瞬間移動は、ずるいだろ」

目の前には、紅い鎧を着た男が立っていた。

加えて男の右手には、銀の槍が携えられている。

強烈な違和感を放つ、現代日本にそぐわない古代の武装は、しかし真紅の鎧に合っていて。

槍の穂先がこちらにぴたりと向けられる。

不思議なことに、事ここに至って、もう死にたくない、なんていう段階は過ぎ去った。

初めから、相手はその気になればいつでも俺に追いつけたのだ。

さっきまでの逃走劇は、鎧の男にとっては茶番だった。

――心が、折れた音がした。

むしろ、いつそ晴れやかな気持ちだ。

しっかり一撃で殺してくれ。

「なんだ、思ったより丈夫な身体してんじゃねえか」

「お前に言われたくねえよ、バケモンめ」

「つち、チンピラだのなんだの、さっきからてめえは人を罵倒しねえと気が済まねえのか」

「はっつ、理由もなく人を殺す奴に指摘されるとは思わなかったな！」

その男は、何故だか。

はあ。といつそため息さえ吐きやがった。

何か、哀れなものを見るような目で俺を見下し、そして真実を語った。

「まさかてめえ、この街の魔術師のくせして聖杯戦争も知らねえのか？」

「・・・、せい、はいがなんだって？」

「まあ良いや。どつちにしろ目撃者は殺す。ましてそれが魔術師なら尚更だ。まあ、あれだ」

「待て、どういう意味――」

「これも一つの運命ってこった。諦めろ」

ざくり、と小気味のいい音が鳴った。

それは心臓が突き破られる音だった。

視界が真っ白に染まっていく。

思考がまったくできなくなる。

――俺は、死んだ。

鎧の男は、槍に突き刺さった俺だったモノを振り飛ばす。

ソレは大きく円を描いて、どこかの蔵に入り込んだ。

ソレの中身からは血がとめどなく流れ続けた。

「つち、つまんねえ仕事だったぜ。：アーチャーも逃がしまうし」

それだけ言って、真紅の鎧を着た男はその場を立ち去った。

「ふう、やっと去ったか」

男が立ち去るのを確認してから、俺はゆっくりと立ち上がった。

貫かれた心臓はもうほとんど修復している。血は流しすぎたのが少しまずいが、しばらく休んでいれば戻るだろう。

身体と、血が直っていくと同時に、腹部に刻まれたルーンが少しずつ薄れていく。

『蘇生のルーン』

常日頃から、死ぬことを異常に恐れる俺が自分自身に施したルーン魔術。

その効果は、味方がいない時に限り、一度だけ瀕死から蘇生するというモノ。

一見万能に見えること魔術ではあるが、当然欠点もある。

例えば、あまりに原型を留めずに体を壊された場合。あるいは、

ルーンを刻んだ箇所ごと潰された場合。

こういったケースの前には、蘇生のルーンは効果を發揮しない。

「あいつの腕が良くて助かったな……」

心臓一突き。断面凶すら綺麗なほどのその鋭さに今回は救われた形になった。

何より助かったのは、あいつが俺が死んだままだと思いついでいることだ。

しばらくこの街を離れば、ひとまずは安全だろう。

せいはいとかいう言葉は気になるものの、自分の命と代えられるものなんてあるわけがない。

そう決意していると、急に眩い光が蔵の中に充滿した。

「は、はあっ!?なんだこれっ」

よく観察すれば、光源は蔵の床だった。厳密には、床に描かれた魔方陣である。

本来、魔方陣はそれ単体ではなんの効力も發揮しないはずだが……もしかしたら、流れた俺の血で作動してしまったのか。

(いったい、何が起ころんだ?)

ゴクリ、と思わず喉が鳴る。

魔方陣はばちばちと紫電を発している。

迸る魔力は一秒毎に増加していき、ついに臨界点に達していた。

そして、蔵の中が派手にドカーンと爆発。ついで壁まで吹き飛ばされる俺。

「ぐふっ!?!」

めちやくちや痛えんですけど!?!そろそろ本当に死にそうなんですけど!!

あまりに理不尽な仕打ちに、いよいよ我慢の限界がきた俺は——そいつに向かって問いたです。

「てめえいったいどこのどいつだ!?!」

「はじめまして。わたしはキャスター。真名を……卑弥呼。順番が逆になりましたが聴きましよう。」

「あなたがわたしのマスターかしら」

そこに立っていたのは、絶世の美貌を誇る女性・・・ではなく、巫女服を纏った可愛らしい少女であった。

尊大な口調を言うだけあって、うちに秘める魔力量は信じられない数値に換算される。

少女は俺をじつと見下しながら、ふつと呟いた。

「・・・もしかして出てくるの遅かった？」

「なんかわからんけど、治療してもらえると助かります」

言いながら、口から吐血する。

それを見た少女は慌てふためきながら、俺の治療に取り掛かった。なんでか、めちやくちや謝罪しながら。

少女の回復魔術を受けながら、俺はそのまま眠りについたー。